

聖書：マルコの福音書 5：1～20

説教題：イエスが自分にしてくださったこと

日時：2025年8月10日（朝拝）

イエス様と弟子たちの乗った舟は、湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着きます。ここは後に、ユダヤ人にとって汚れた動物である豚が多く飼われていたことから分かる通り、異邦人の地域、ガリラヤ湖東岸の地であったと考えられます。そこに着いて舟から上がるとすぐに、見るからに異常な姿をした人がイエス様と弟子たちを迎えました。その人について言われていることを見て行くと、まず「汚れた霊につかれた人」とあります。後にこの霊はレギオンすなわち大勢であると語られます。レギオンとはローマ軍の5～6千人からなる部隊を指す言葉でした。これまでもイエス様は悪霊につかれた人から悪霊を追い出したことがありましたが今回は規模が違います。今回は悪霊の軍団です。桁違いの数の悪霊がこの人に臨んでいました。また彼は「墓場から出て来て」と2節にあり、3節では「墓場に住みついていた」と記されています。社会的に疎外されてここにいたのでしょうか。彼は死の世界に片足を突っ込んでいるような人として、そこにいました。また「だれも、鎖を使ってでも、彼を縛っておくことができなかった」とあります。4節では「彼はたびたび足かせと鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまい、だれにも彼を押さえることはできなかった」とまで書かれています。人々は彼を危険な存在と見なし、鎖でつなぎとめようとしたのですが、彼はそれを容易に引きちぎってしまいます。恐るべきパワーです。まさに悪霊の力です。そして彼は「夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけて」いました。彼は人に危害を加える危険性があつたばかり、自分自身をも傷つけていました。彼はこうして大変な数の悪霊に支配され、死に向かって追い立てられていました。

果たして今日の私たちはこのような記事をどう読むべきなのでしょう。文明発達以前の迷信的な記事として困惑しながら読むしかないのでしょうか。そうではありません。これは聖書に基づくなら、今日の私たちと深い関係を持つ言葉です。前回触れた通り、4章35節から5章終わりにかけて、イエス様が様々な力の上に権威を持ちたもう方であることが連続して記されています。そこに描かれているのは、罪ゆえに色々な苦しみの下にある人間の現実です。前回、弟子たちはガリラヤ湖の嵐に悩まされました。こうした自然災害も人間の罪の結果、この世にもたらされるようになったもの

です。しかしイエス様はその大自然の力にはるかに勝る権威を持ち、そこからも私たちを救い出すことのできる救い主であることが示されました。それに続く今日の箇所では圧倒的な悪霊の力の下にある人間が描かれています。これも人間の罪ゆえにこの世界に臨んだことです。最初の人間アダムは神よりも悪魔の言葉を信じ、その結果、人類は悪魔の支配下にある者となったと聖書は語ります。たとえばヨハネの福音書 12 章 31 節ではサタンを指して「この世を支配する者」と言われています。コリント人への手紙第二 4 章 4 節では、同じくサタンのことが「この世の神」と言われています。またヨハネの手紙第一 5 章 19 節には「世全体は悪い者（すなわちサタン）の支配下にある」と言われています。その悪魔の力の下にあって、アダムの墮落を引き継いでいる人間はすべて自由な状態にないことがエペソ人への手紙 2 章 1~2 節で次のように言われています。「さて、あなたがたは自分の背きと罪の中に死んでいた者であり、かつては、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者、すなわち、不従順の子らの中に今も働いている霊に従って歩んでいました。」この御言葉が語る通り、生まれながらの私たちは体は生きていても霊的には死人の状態にありました。まさに今日の箇所の墓場に住む人の姿と重なります。また彼に見られる凶暴さは今日の人間にも見られるものではないでしょうか。連日、凶悪事件の報道が絶えません。ハンマーで殴ったり、ナイフを振り回したり、それで人に危害を加え、命を奪う。戦争も日常化しています。いやもっと身近なレベルで考えれば、私たちも日常生活で同じようなことをしているのではないのでしょうか。ともに生活する者たちにひどい言葉や乱暴な言葉を浴びせ、威嚇したり、脅したり、傷つけたりする。他者が止めようとしても聞かず、暴れまくり、吠えまくり、他人と自分の両方を破壊しようとしています。それはまさに悪霊の言いなりになっている姿であり、今日の箇所に登場する人と同じ状態にあることを意味しているのではないのでしょうか。

そんなところへイエス様が来られました。イエス様は大自然の上にはばかりでなく、悪霊（レギオン）の上にも圧倒的な権威を持つ方としてここに来られました。悪霊につかれた人は遠くからイエス様を見つけ、走って来て拝します。それは彼、すなわち彼に臨んでいる悪霊たちは、この方に勝ち目がないことを知っていたからです。その権威を認めて先にひれ伏すより他、生き延びる道はありません。悪霊たちは何とかして助かろうと必死に策を巡らします。まず「いと高き神の子イエスよ」と叫びます。人間はイエス様がどのようなお方か、まだ理解していませんが、霊的存在は知っています。彼らが「いと高き神の子イエスよ」と言ったのは、前にも出て来ましたように、

相手の名すなわちその正体を言い当てることで相手の上に力を持つとしたからです。しかし彼らはイエス様と戦いたくはありません。そこで「私とあなたに何の関係があるのですか」と言い、さらに「神によってお願いします」と言います。これは通常、悪霊払いで用いられる言葉です。それを先に自分たちが口にして、何とか自分たちの願いを聞いてもらおうとします。「私を苦しめないでください」と。もう勝負はついているのです。8節にある通り、「汚れた霊よ、この人から出て行け」というイエス様の命令に彼らは対抗することができないのです。

イエス様が「おまえの名は何か」と問うと、彼は「私の名はレギオンです。私たちは大勢ですから」と答えます。そして「自分たちをこの地方から追い出さないでください」と懇願しました。ここは異邦人の地、異教世界であり、彼らにとって落ち着くところであるのは当然です。ここは彼らが自分たちの領土として来たところでした。そこに神の子が入って来たのです。彼らは私たちを「豚の中に送ってください」と懇願します。悪霊たちは、聖書の他の箇所からも分かるように、たださまよう状態は好まなかったようです。真空状態を嫌い、もし人間から追い出されるとしても、せめて豚の中に入ることを許可してほしいと願います。イエス様が許可するとどうなったのでしょうか。13節にある通り、「二千匹ほどの豚の群れが崖を下って湖へなだれ込み、その湖でおぼれて死」にました。ガリラヤ湖東岸はおびただしい豚の死体で埋め尽くされました。それは何と恐ろしく、また呆然とするような光景だったことでしょう。

この記事を読む私たちは様々な疑問を持つかもしれません。特に現代では 2000 匹もの豚がおぼれて死ぬことをイエス様が良しとされたことをどう考えたら良いのか、その持ち主の経済的損失はどうなったのか、といったことに思いが向く人が多いかもしれません。しかし聖書はそれらについて何も語っていません。つまりこの話の焦点はそこにはないということです。書かれていないことを憶測で論じても益は少なく、むしろこの箇所が語ろうとしていることに焦点を合わせるべきでしょう。この箇所から少なくとも次のことは言えると思います。まず一つは、この出来事はいかにとつもない悪の力が、このゲラサ人の上に臨んでいたかを目に見える形で示したということです。彼に多くの悪霊がついていたことは人々も知っていたでしょう。しかし、まさか豚 2000 匹を一度に死に至らしめるほどの悪霊の力が彼に臨んでいたとは誰も想像しなかったでしょう。ここにそれまで見えなかった悪魔の破壊的な力を見させられたのです。またここに一人の人がレギオンの力から解放されるには、これだけの犠牲

が必要となるということも示されていると言えます。人間が罪のために陥った悲惨と呪いから救い出されるためには、このような代価が必要とされるということです。これはやがてキリストが払ってくださる代価の大きさを指し示すものでもあります。ここで払われた犠牲は恐ろしいほどですが、キリストはそれ以上の犠牲を払って私たちを救い出してくださいます。そしてもう一つは、このような犠牲が払われるとしても、この人は救われる価値があるということです。私たちは失われた豚 2000 匹の価値を計算することに思いが行きがちですが、それ以上にこの一人の人の救いは尊いということです。聖書は人間のいのちを測り知れない価値を持つものと見ています。神はそのように私たち一人一人のいのちを尊く見ておられるのです。

こうして悪霊の力から解放された人の姿が 14 節以降に記されています。彼は服を着ていました。つまりそれまでは裸であったということです（ルカの福音書の平行記事からはっきり分かります）。彼はこうして人間らしさを取り戻します。また正気に返って、座っていたとあります。落ち着かず、常に立ち歩いていた状態から、落ち着いて座る平和の状態へと導かれました。悪霊からの解放は人間性の回復を意味します。神のかたちに造られた人間本来の姿への回復です。

では、この彼を見た町の人々はどう反応したでしょうか。彼らは恐ろしくなりました。そしてこれまでのことを詳しく聞いた結果、17 節にあるように、イエス様に「この地方から出て行ってほしい」と懇願します。あれほど悲惨な状態にあった人が悪霊から解放され、人間らしさを取り戻した出来事は本来「良い知らせ」であるはずですが。救い主が来られたことを知ったなら、この方に頼り、その救いにあずかることを自ら求めるようになって良いはずですが。しかし彼らはこの方の存在が自分たちの生活を変えてしまうのではないかと恐れ、救い主を追い出したのです。これは 4 章 12 節に記されていた御言葉、「彼らは、見るには見るが知ることはなく、聞くには聞くが悟ることはない。彼らが立ち返って赦されることのないように」の通りです。福音の種を受け入れない固く閉じた心が、ここに現れています。

一方、彼は「お供させてほしい」とイエス様に願いました。しかしイエス様は許さず、こう言われました。19 節：「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい。そして、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい。」ある人は疑問に思うかもしれませんが。これまでイ

イエスはみわざを行った後、「誰にも話すな」と命じることが多かったのに、なぜここでは反対に「知らせなさい」と言われたのかと。その理由の一つは、ここが異邦人の地であったからかもしれません。ユダヤ人社会にあった誤ったメシア観が助長されるという懸念がなかった。またそれに加えて、この町の人々が「出て行って欲しい」と願ったため、イエスは去ることになります。もうここにはいません。そこでこの彼を宣教師として遣わしたということです。それはこの異邦人世界をもイエスが心にかけておられる証拠です。「あなたの家、あなたの家族のところに帰りなさい」という言葉は、家族だけではなく、友人や知人おも含む広い意味を持つと考えられます。そこへ行って「主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを知らせなさい」と命じられます。特別難しいことではありません。主が自分にしてくださったこと、自分が体験した救いを証しするのです。彼はこれに忠実でした。彼は「イエスが自分にどれほど大きなことをしてくださったかを、デカポリス地方で言い広め始めた」と聖書は記します。人々はみな驚きましたが信じたとまでは書かれていません。町の人々の反対も依然あったでしょう。それでも彼は語り続けました。そして参考になるのはイエスが再びこのデカポリス地方を訪れた時のことです。7章31節以降にその記事がありますが、そこでは人々が病人をイエス様のもとに連れて来ます。イエス様に期待を寄せ、そのみわざを求めます。このような反応の基礎を今日の彼の証しが作ったと考えられます。彼は異邦人世界への最初の宣教師として遣わされ、確かに主の御心に答える歩みをしたのです。

私たちもこの人の姿に自分を重ね合わせ、今日の御言葉から教えられたいと思います。私たちもみなかつては悪霊や悪魔の力の下にありました。自分の思うように生きられず、罪の奴隷、サタンの奴隷として束縛状態にありました。その中で苦しみ、叫び、他の人を傷つけ、自分自身をも傷つけて、滅びへと突き進んでいました。しかしイエス様が来てくださり、その下から救い出してくださいました。豚 2000 匹どころか、それ以上に尊いご自身の身代わりの死という犠牲を払ってです。その救いをいただいた私たちは人間らしさを取り戻す者へと導かれました。正気に返り、神を知り、神に感謝し、落ち着きと喜びを持って歩む者とされました。そして今も神のかたちを益々回復させ、発展させて行く救いのプロセスの中を歩む者とされています。

そんな私たちにもイエス様は19節の言葉を語っておられるのではないのでしょうか。「あなたの家、あなたの友人のところへ行って、伝えなさい！」と。それは何か高尚

な議論をすることではなく、「イエスが自分にしてくださったこと」を語るのです。今日の説教題はそのように「イエスが自分にしてくださったこと」としました。私たちはみな、それを知っているはずです。なぜならそれは自分が経験したことだからです。イエス様が私に与えて下さった新しい人生、新しい目標、新しい動機、新しい力。また日々与えられる真の慰め、励まし、喜び、希望。それらを自分の言葉で、自分の存在をもって証しするのです。もちろんそれはすべての人に受け入れられるわけではありません。彼が異邦人世界にただ一人で遣わされたように、私たちも似たような状況があるかもしれません。しかしそれは主が与えてくださった使命に生きることです。そしてそれは思わぬ形で主のために用いられるものです。私たちもこの彼に自らを重ねて、「イエスが自分にしてくださったこと」をもう一度振り返り、感謝し、それを自分の家、また周りの人々に知らせる者として、イエス様によって遣わされたいと願います。そして主の使命に応え、神の国を広げるために用いられる者とされて行きたいと思えます。